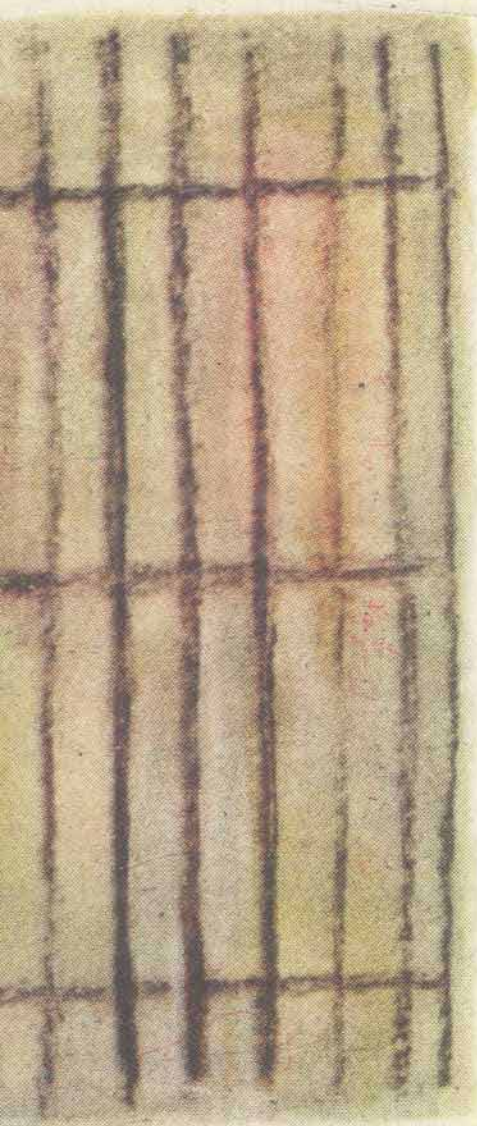


# 次郎物語

第一部

下村湖人



新潮文庫

次郎物語

第一部

定価 120 円



新潮文庫

昭和二十九年十二月五日 発行  
昭和四十年二月十日 二十九刷

著者 下村湖人

発行者 佐藤亮一

東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京二六〇局一一一一(大代)  
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

金

印刷・株式会社 金羊社 製本・相原製本所

© Printed in Japan

新 潮 文 庫

次 郎 物 語

第 一 部

下 村 湖 人 著



---

新 潮 社 版



次郎物語

第一部

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

## 一 お猿さん

「癪しやくにさわるったら、ありやしない。」と、乳母のお浜が、台所の上りがまち框に腰をかけながら言う。  
「全くさ。いくら気がきついたって、奥さんもあんまりだよ。まるで人情というものをふみつけにしているんだもの。」と、竈かまどの前で、あばた面をほてらしながら、お糸婆さんが、能弁にあいづちをうつ。

「お前たち、何を言っているんだよ。」と、その時、台所と茶の間を仕切る障子が、がらりと開いて、お民のかん高い声が、鋭く二人の耳をうつ。

お糸婆さんは、そ知らぬ顔をする。お浜は、どうせやけ糞だ、といったように、まともにお民の顔を見かえず。見返されて、お民はいよいよきつとなる。

「お浜、あたしあれほど事をわけて言っているのに、お前まだわからないのかい。恭一ききやうは何と言つても総領そうりやうなんだからね。どうせあの子を、そういつまでも、お前の家に預けとくわけにはいかないじゃないか。」

「そんなこと、もうわかっていますわ。どうせ御無理ごもつともでしょうからね。」

「お前何ということをお言いだい、私に向かつて。……お前それですむと思うの。」

「すむかすまないかわかりませんわ。まるで欺たましうちにあつたんですもの。」

「欺しうちだつて。」

「そうじゃございませんか。恭さんをちよつと連れて来いとおっしゃるから、つれて上ると、すぐにお祖母さんに連れ出さしておいて、そのあとで、こんなお話なんですもの。」

「それで、お前すねたというのだね。」

「すねたくもなろうじゃありませんか。私にも人情っていうものがございますからね。」

「すると、恭一の代りに、次郎を預るのは、どうしても嫌だと言いなのかい。」

お浜はそっぽを向いて黙りこむ。

「何というわからずやだろうね。私に乳がないばかりにこうして頼んでいるのに、やさしく言えばつけ上つてさ。……嫌なら嫌でいいよ、もうお前にはどの子も頼まないから。その代りこの家とはこれっきり縁を切るから、そう思い。飯米に困るなんてまた泣きついて来たって知らないよ。恭一にだつて、これからはどんな事があつても逢わせるこつちやない。」

お民は、そう言つてぴしやりと障子をしめた。

「奥さん、そりやあんまりです。あんまりです。」

お浜はしめられた障子のそとでわめき立てた。

「何があんまりだよ。」

「あんまりですわ。やつと恭さんを一年あまりもお育てしたところを、だしぬけに、今度の赤ちやんのような、あんな……」

「あんな、何だえ。」と、また障子のがらりと開く。

「……………」

「はっきりお言い。」

「まあまあ、奥さん、わたしからお涙どんにはよう言つて聞かせましょうで……」と、お糸婆さんが、やっとなだめにかかる。

「言つて聞かせるもないもんだよ。年寄りのくせに、お涙にあいづちばかりうつていてさ。」

「へへへへ。」お糸婆さんは、お齒黒のはげた齒をむき出して、変な笑いかたをする。

その時、奥の方から赤ん坊の泣き声がきこえた。お民は障子をしめながら、二人をぐっと睨めつけておいて、その方に立つて行く。

「どうせお前さんの思う通りにやなりっこないよ。あきらめたらどうだね。」と、お糸婆さんはお涙に寄りそつて小声で言った。

「やっぱり今度の赤ちゃんを預るのさ。飯米のこともあるしね。」

「あたしや、飯米のことなんか、どうだっていいっていう気がするんだよ。」

「そりや、お前さんの今の気持はそうだろうともさ。だけど飯米もふいになるし、恭さんにもこれから逢えないとなりや……」

「ほんとうに逢わせない気だろうかね。」

「そりや、あの奥さんのことだもの。……お前さんも随分勝気だが、奥さんにあっちゃ叶いっこないよ。こうと決めたら、ていこでも動くこっちゃないからね。」

「そのうちには、恭さんもわたしたちを忘れてしまうだろうね。」

「そりや、何といってもね。……だから、やっぱり今のうちに、お前さんの方で折れた方が何かと工合がいいんだよ。」

「でも、恭さんの代りにあんな猿みたいな子を預るのかと思うと……」

「そんなこと言うのは、およし。聞えたらどうする。」

「だって、本当だろう。お前さん、そうは思わないかい。」

「それほども思わないよ。そりや恭さんとはくらべものにならないけれど。」

「恭さんは、そりや生まれた時から品があつたよ。」

「今度の赤ちゃんだって、育てていりや、そのうち可愛くなるさ。」

「あんなお猿さんみたいな顔でもかい。」

「およしたら。ほんとに聞えたら知らないよ。」

「聞えたら、聞えたでかまわないさ。」

「でも、それじゃ、何もかも駄目になるじゃないかね、第一、恭さんにも一生逢えなくなるよ。」

「それでもいいのかい。」

「ああ、ああ、癪でも、やっぱり預ることにしようかね。」

「そうおし、飯米のこともあるしね。」

「また飯米のことかい。よしておくれよ。あたしや、恭さんが可愛**い**ばかりに、あんな猿**み**た**い**な赤**ち**ゃ**ん**でも、預**つ**てみ**よ**う**と**い**う**ん**だ**よ。」

「おやおや、えらいご奮**ふん**発**ぱつ**だね。でも、預る気になつてくれて、わたしも奥さんに申訳が立つと

いうわけさ、……どうれ、また気が変らないうちに、奥さんに知らしてあげようか。」

お糸婆さんは、にたにた笑いながら奥に行った。そして、お民にさんざん噛みつかれながらも、ともかくもうまく話をまとめた。

そこで次郎はその日から、恭一に代って、お浜の家に里子さとこに行くことになったわけなのである。だが、お浜が次郎をいつまでもお猿さん扱いにして嫌きらっていたかというところ、そうではない。三四カ月もたつと、彼女の愛情は、もうすっかり恭一から次郎の方へ移ってしまっていたのである。

お民は、次郎が次男坊なためか、或いはお浜が言ったように、實際猿みたいな顔をしていたためなのか、恭一を預けていた頃にくらべて何かにつけ冷淡だった。お浜にはそれが癪さかだった。そして、それがかえって彼女の次郎に対する愛着を増す原因のひとつでもあったのである。

ある日、お浜は次郎の大きくなったのを、お民に見せたいと思って、しばらくぶりやって来た。するといきなりこんな会話が始まった。

お民——「おかげで、お猿さんも随分大きくなったわね。」

お浜——「まあ、お猿さんですって？」

お民——「そう言っちゃ、いけなかったのかい。」

お浜——「だって、ご自分の御子様じゃございませんか。」

お民——「でも、お猿さんって言うのは、お前がつけてくれた名だっていうじゃないの。ちゃんと婆さんに聞いて知っているのよ。」

お浜——「あの時は、あの時ですわ。いつまでもそんな……」

お民——「少しは人間らしい顔に見えて来たと、お言いなのかい。」

お浜——「奥さんたら、わたし、くやしいっ。」

お民——「おや、泣いてるの、ついからかってみたくなつたのだよ。すまなかつたわね。」

お浜——「からかうのも、事によりますわ。奥さんがそんなお氣持でしたら、私にも考えがあります。」

お浜は、ぶんぶん怒って、次郎を抱いて帰ってしまった。そして、それっきり、お民から何度使いをやっても顔を見せなかったばかりか、月々の飯米さえ受取りに来ようとしなかった。で、とうとうお民の方が根負けして、自分でお浜の家に出かけることになった。

今度は、無論お猿の話なんか、どちらからも出なかった。それどころか、お民はこんなことを言つて、お浜の機嫌をとつたのである。

「この子は八月十五夜の丁度月の出に生まれたんだよ。だから、きっと今に偉くなると思うわ。」お浜は、それですっかり氣をよくした。そして、それ以来、「八月十五夜の月の出」が、いつも二人の話の種になった。話の種になつても、それはちつとも不都合ではなかつたのである。と言

うのは、次郎の生まれた時刻は、實際その通りだつたのだから。尤も、その時刻に生まれたことが、果して次郎にとって幸福であつたかどうかは、疑わしい。

それはおいおいと話していくうちにわかることである。

## 二 お玉杓子

次郎は、お浜の娘のお兼とお鶴とを相手に、地べたに蓆じしを敷いて、ままごと遊びをしている。場所は古ぼけた小学校の校庭だが、森閑しんかんとして物音一つしない。周囲は、見渡すかぎり、黄金色の稲田である。午後の陽がほかほかと温かい。

この光景は、次郎の心に、おりおり蘇よみがえって来る、最も古い記憶の一つで、たぶん、彼の五歳頃のことだったろうと思われる。

お浜一家は、村の小学校の校番をしていた。老夫婦にお浜夫婦、それにお兼とお鶴、都合六人の家族が、教員室のすぐ隣の、うす暗い畳敷の部屋と、その次の板の間とを自分達の住家にしていたのである。そしてそこへ割りこまされたのが次郎であった。

全体、恭一にせよ、次郎にせよ、何でわざわざこんな家を選んで預けられたのかというと、それは、母のお民が、子供の教育について、一かどの見識家けんしきかだったからである。彼女は、槍一筋やりひとすじの武士の娘であった。そして、幼いころから幾十回となく、孟母三遷もうぼさんせんの教というものを聞かされて、それになみなみならぬ感激を覚えていた。で、自分に子供が出来たら、機会を見つけてそれに似たようなことを実行してみたいと、かねて心に期していたのである。

こうした抱負をもった彼女にとって、お浜一家が学校の中に寝起きしているということが、大きな魅力にならないわけはなかった。この魅力の前には、校番の部屋が狭くて不潔であろうと、

お浜本人が、以前三味線の門付けをしていた女であろうと、また、彼女の亭主の勘作が、どこかの炭坑稼ぎにあぶれて、この村に流れこんで来た者であろうと、そんなことはまるで問題ではなかったのである。

そこで、三人の日向ぼっこの話にもどる。

次郎は蓆の中央に殿様のように座を占めて、お兼とお鶴とが、左右からつぎつぎにブリキの皿に盛って差出す草の実や、砂饅頭に箸をつける真似をしていた。しかし、もう同じような遊びを小半時も続けていたので、少し厭きが来たところだった。厭きが来ると、次郎はいつもお兼だけをのけ者にしてお鶴と二人きりで遊びたい気持になるのであった。お兼は恭一と同じ年、お鶴は次郎と同じ年で、これが次郎をして自然お兼よりもお鶴の方に親しませる理由だったらしい。が、同時に、色の黒い、藪睨みのお兼にくらべて、ふっくらした頬とくるくるした眼をもったお鶴の方が、より大きな魅力であったことも否みがたい事実であった。

ところで、次郎にとって、ここに一つの悲しむべきことがあった。それはお鶴のふっくらした左頬に、形も大きさも、お玉杓子そっくりなあざが一つくっついていたことである。次郎はいつもそれが気になって仕方がなかった。その日も、ままごとに厭くと、お兼にくるりと尻を向けてお鶴と差向いになったが、その時、早速眼についたのがそのお玉杓子であった。

お鶴は、次郎のそんな仕草にはちっとも気がつかないで、相変らず草の葉を刻んでは、せっせとそれをブリキ罐の中にためこんでいたが、永いこと陽に照らされて、ピンク色に染まったその頬の上に、鮮かに浮き出したお玉杓子が、次郎の眼には、いかにも血がかよって動いているよう

に見えたのである。

次郎は変に心が落ちつかなくなった。そして、しばらくの間は、むずむずした気分で、それに見入っていた。そのうちに、彼の右手の人差指がいつの間にかそろそろと伸びていって、こわいものにでも触れるように、そっとお鶴の頬をかすめたのである。

お鶴には、次郎が何でそんなことをするのかわからなかった。で、彼女は相変らずお玉杓子を頬にくっつけたまま、きよんとして次郎の顔をみつめた。

お兼は、藪睨みの眼を一層藪睨みにして「ひっひっ」と次郎のうしろで笑った。

次郎は、その笑い声をきくと、何か非常に悪いことでもしたように思って、きまり悪くなった。ところで、男の子供というものは、きまり悪くなると、時として、妙に乱暴な気分になるものである。彼は急に立ち上って、あたりにあるままごと道具を、めちやくちやに足で蹴ちらしはじめた。

お兼がまた「ひっひっ」と笑った。

すると、次郎は何と思ったのか、今度はいきなりお鶴の方に飛びかかって行って、お玉杓子のくっついている頬を、ねじ切るようにつねり上げたのである。

お鶴は火がつくように泣き出した。

「父っちゃん」と、お兼は金切声をあげて、校番室の方に走り出した。そして、それから一二分の後には、次郎の両手は、勘作の木の根のような掌てのひらの中に、しっかりと握りしめられていたのである。

「何しやがるんだい、こいつ。」と、勘作の怒った声。

同時に、次郎の体は、乱暴に宙につり上げられた。手首と肩のつけ根とが無性に痛い。

次郎は、それでも、泣き声を立てなかった。彼は両足をばたばたさせながら、めちやくちやに勘作の下腹を蹴った。

「この餓鬼め。」

次郎は、いきなりうつ伏せに地べたに放り出された。掌と、唇と、鼻柱と、膝頭とが、その瞬間に、打ちくだかれたような痛みを覚えた。彼は四五秒の間突っ伏したまま、身じろぎもしなかったが、次の瞬間には、地の底で鷲鳥が締め殺されるような泣き声を立てた。

お鶴も仰向けになってまだ泣いていたが、次郎の泣き声を聞くと、一層大きな声を出して泣いた。そしてそれから二人はせり合うように、代る代る泣き声をはり上げた。

勘作は突っ立ったままじっと次郎を睨めつけていた。

「どうしたんだね。」と、そこへお浜が掃除をしていたらしく、竹箒を持ったままやって来た。

「何だか知らねえが、こいつ、お鶴の頬べたを、ひどくつねっていやがったんでね。」

「それでお前さんは、坊ちゃんをなげとばしたとお言いなのかい。」

「そうだよ。」

「そうだよもないもんだ。たかが子供の喧嘩じゃないかね。仕事なしだとは言いながら、大の男が、子供の喧嘩を買って出るなんて、そんな話がどこの世界にあるもんか。」

「お浜、おめえ、自分の子が可愛いくはねえのか、こんな目にあわされても。」

「何言ってるんだよ。ばかばかしい。可愛いけりやこそ、こうやって私の手一つで育てているんじゃないかね。お前さんこそ、子供が可愛いくないんだろう。毎日毎日ぶらぶらして、びた一文こさえて来るではなしさ。」

勘作はそっぽを向いて、黙ってしまった。

それまで、気のぬけた泣き声を出しながら、二人の言いあいに関き耳を立てていた次郎は、どうやらお浜の方が優勢らしいのを知って、ほっとした。そして、もう一度お浜の同情を求めるために、大きな声を立てた。するとお鶴の方でも、それに負けないでわめき立てた。

「いつまでも泣くんじゃない。」

お浜は、お鶴をかくくたしなめてから、次郎の突っ伏しているそばにやって来た。

「次郎ちゃん。勘忍かんにんなさいね。」

お浜は他の人に向かつては、次郎のことを「坊ちゃん」と呼ぶのだが、次郎本人に対しては、いつも「次郎ちゃん」と呼ぶことにしているのである。

「次郎ちゃんは、もう大きくなったんだから、お偉いでしょう。さあ、自分で起きるんですよ。」

次郎は、しかし、お浜にそう言われて、足をばたばたさせながら、もう一度烈しくわめき立てた。すると、お浜は、うろたえたように、持っていた箒を地べたに置き、彼を抱き起こしにかかった。

「おやっ。」